

名古屋女子大学

5号

## 総合科学研究所だより

Research Institute of Human Ecology, Literature and Education



## 巻頭言

総合科学研究所長  
柴山 正  
SHIBAYAMA Tadashi

日銀短観によりますと、日本経済は巡航速度で成長し、企業業績の先行きも明るく、景気拡大も視野に入りました。しかしわが国は、世界に類を見ない少子高齢化・人口減少社会、IT革命に伴う経済のグローバル化の進展や高等教育機関における第三者評価の義務化、特色GP、現代GP、グローバルCOEプログラムが導入されるなど、大学を取り巻く環境は大きく変わっています。その他、社会のあらゆる面において二極化が顕在化し問題になっています。この大きな構造的変化が展開している中で、私たちの身近な生活環境や都市・地域社会も、こうした状況への適切な対応に迫られています。

そこで快適な環境を次世代に引き継ぐことや、価値観の多様化がどんどん進む中で、伝統・文化を享受できる安全でゆとりあるコミュニティーが求められています。今後、高等教育には、「なおいっそう複雑化し、変容する社会のニーズに応えられる教育力の向上」が求められます。

「総合科学研究所」は、平成13年に生活科学研究所と教育研究所が統合されて出発いたしました。その目的は「名古屋女

子大学の建学の精神に基づき、自然・家政及び文化・教養に関する理論並びに実際に研究すると共に、その専門分野の枠にとらわれず広く共同研究、調査を推進し、文化の創造と学術の進歩、併せて地域文化の推進向上に貢献すること」です。この目的を実現するために、女子教育に邁進する本学の特性を生かした先駆的な取り組みを推進し、人・モノ・情報の流れを支えるネットワークを形成して、地域社会との共存共栄を図ることが大切です。

現在進行中の「(1)機関研究:①創立者越原春子および女子教育に関する研究 ②大学における効果的な授業法の研究 ③幼児の才能開発に関する研究 ④中学生の学力向上に関する研究 ⑤高校生の学力向上に関する研究(今年度新設) (2)プロジェクト研究:①ICTを利用した国際交流プログラムの企画・実践とLMSを通じた基礎的支援 (3)開かれた地域貢献事業 (4)講演会」等は、着実に成果を上げ、「社会に開かれた大学と地域社会への貢献」に重要な一端を担っております。

これまでの先達の歴代所員が築かれたすばらしい実績を勘案して、今後は、民間・大学・行政機関などとの交流を一層強め、更なる「学生の未来を輝かせる大学教育の実践と地域社会の活性化」に繋がる一助になるように努力をする所存です。然るに、本研究所の教育・研究活動に、より多くの教職員が参加されることを期待しますと共に、これまで以上のご指導・ご協力を賜りますようお願いいたします。

## 「開かれた地域貢献事業」

—真冬に春のライトアップ『春待ち・小町(はるまち・こまち)』で、文化的情報の相互交流—

◎川田博美・鷺野友美

この企画のテーマである『春待ち・小町(はるまち・こまち)』には、寒い冬を越えれば必ず春が来るという、学生たち(小町)が自分の夢の実現に向かって本学で頑張っているというイメージが込められています。桜の名所であるここ瑞穂区で、春がまもなくやってくる12月に、一足先に桜をテーマとしたライトアップを行い、夢多き小さな町(小町)を桜の花を咲かせて演出します。地域の皆様には、この『学生の手による』小さな町で、ほんの少しでも暖かい気持ちになっていただければと考えます。会場となる中庭では、『桜のライトアップ』の他、『ライトアップ・コンテスト』、『学生作品の展示』、『地域の皆さんの作品展示』など、本学から地域へ、地域から本学への文化的情報発信の相互交流を展開します。(学生の感性とコミュニケーション力を育む「音と光のフェスティバル」プロジェクト)

(文責:川田 博美)



機関研究

## 「創立者越原春子および女子教育に関する研究」

◎丸山竜平・伊藤太郎・木原貴子・遠山佳治・羽澄直子・依岡道子

本研究は、女子大学の存在・存続の積極的かつ今日的意義を明確化しようとするものです。そのうえで、将来これらの研究成果に鑑み、有用性のある実践的研究を積み重ね、よりよい大学へと改革を遂行していくための基盤的研究としたい、と考えています。

このため、いきおい創立者・越原春子の研究および洋の東西を問わず女子教育の研究といったものが、本件の中心的研究対象となっています。しかるに本研究では、時代や地域性といったものをとくに限定的に扱うことはなく、上に掲げた共通の研究の目的のもとで、それぞれ教員の専門分野を生かした自由で、斬新な、それでいてグローバルな視野からの研究を期待するものです。

なお、本研究会会議は月一回程度の割合でおこない、構成員の研究発表を通じてメンバー相互の研鑽を図りたい、と考えています。メンバー以外の積極的な参加も歓迎します。

(文責:丸山 竜平)

機関研究

## 「幼児の才能開発に関する研究」

～豊かな感性や表現力を育むための実践～

◎幼児保育研究グループ

18年度まで3年間の研究テーマを継続しながら、感性や表現力を育むことに関連の深い造形あそびとリズムあそびを中心に実践研究を進めてきました。これまでの研究から、感性や表現力を育む実践においては、個々の幼児の育ち及び仲間集団やクラスの中に見られる関係を基本として環境構成することの重要性を再認識することができました。

19年度は、これまでの活動を通して、3歳児から5歳児までの個々の幼児の育ちがどのように促されてきたのかを再度確認しながら、より望ましい教育活動のあり方を検討していくために、まとめとしての実践研究に取り組んでいます。1学期は、3・4歳児において、リズムあそびと運動あそびを並行させ、身体を動かす活動への取り組みをスタートさせました。

(文責:森岡 とき子)

機関研究

## 「高校生の学力向上に関する研究」

◎高等学校学力向上研究グループ

今年度から高等学校においても、総合科学研究所と連携した形での研究活動を開始することとしました。これまでも中学校においては長い研究活動の歴史があり、その成果は輝かしいものがあります。一步でも近づけるよう高等学校研究員一同張り切っております。

さてテーマに掲げた「高校生の学力向上に関する研究」はかなり大きな幅のあるテーマであります。「学力とは何か」と問えば、いくつもの意見があり、議論はつきないところです。今回われわれがまず取り組むことにしたのは、進学指導に重点を置いた「学力」の向上であります。現在高等学校ではⅠ類・Ⅱ類・Ⅲ類の3つのコースに分けられ、それぞれ特色のある教育を展開しています。中でもⅠ類は国公立大学・難関私立大学への進学を目指した授業を展開しています。その結果として大学入試センター試験で7割～8割の得点を取る学力の育成が急務になっています。進学指導重点校を指定して学力向上を進めている他府県の学校の実情について、講演を伺ったり、視察をしたりして探求すると同時に、公開授業を通して研究を進めていきたいと考えています。

(文責:江本 幸司)

プロジェクト研究

## 「ICTを利用した国際交流プログラムの企画・実践とLMSを通じた基礎的支援」

～質の高い家庭科教員養成のためのプログラム開発の試み(その2)～

◎白井靖敏・山口厚子

本研究では、18年度に行ったプロジェクト研究(その1)に引き続き、日本の高校生とシンガポールの高校生との国際交流を進めるにあたり、家庭科に関するテーマ(生活文化、食文化、衣生活など)を設定して効果的に行うため、相手国の教員とのスケジュール調整、生徒の英語力の育成、ICTを用いたMailing-list、Skype、Webなどの情報共有システムの再構築、および、授業で取り扱う内容や手法、さらには交流の場となる目的別の教育実践的なプラットホームの構築などを行います。

19年度前半でオープンソースのMoodle(e-learning)の構築と運用準備を行っています。後半には、質の高い家庭科教員養成のためのプログラム開発について「国際交流」に焦点をあてた研究をゼミ学生の協力のもとで進めます。その際、昨年度の成果と課題を基礎にステップアップした研究としたいと考えています。この取り組み全体は、当然のことながら本学の家庭科教員養成カリキュラム発展に貢献し得るものです。

(文責:白井 靖敏)

機関研究

## 「大学における効果的な授業法の研究4」

～初年次教育(科目)についての授業法の開発～

◎遠山佳治・伊藤太郎・宇野民幸・白井靖敏・竹尾利夫・谷口富士夫・原田妙子・幸順子

高等教育が「ユニバーサル化」の段階を迎え、入試形態の多様化により様々な学力レベルの学生が入学してくると共に、進学率の上昇に伴って主体的にはない形で進学し、学ぶ意欲や学ぶ動機に欠けた学生が増加してきている状況に対し、高校から大学への「移行」を如何に円滑に行えるかが大きな課題となっています。本学においても、初年次教育の見直しを迫られている中で平成18年度から進められた本研究では、各大学における初年次教育の実践例の検討を進めています。今回は、「初年次教育 歴史・理論・実践と世界の動向」(丸善株式会社)の中から、「初年次教育の総合化と学士課程教育への展開」で特色GP採択プロジェクトを獲得された大学の実践例を紹介します。

この大学では、初年次教育のスキームは、入学前の教育と1年次全体です。入学式前後1週間を「フレッシュマンウィーク」とし、入学前には学科や履修についてのガイダンスとして「ウォーミングアップ学習」、上級生による「キャンパスツアー」などが行われています。また、春学期には、タイムマネジメント・聴く・読む・調べる・整理する・まとめる・書く・表現する・伝えるなどの内容でスキル型の「学習技術」と、大学卒業後の社会生活についての設計、キャリアプランを多角的に立てることを目指すモチベーション型の「キャリアプランニング」を開講しています。さらに、秋学期にはスキルの再確認として社会やキャリアについての認識や理解を深め、専門教育への橋渡しをする内容で「基礎演習」が開講されています。これらの教育を有効に行うために、プログラムの開発・コンテンツや手法の提供を行う初年次教育研究開発センター、分析や指針の提示・有効性についての評価を行う高等教育開発センター、学習不適応の早期発見と学生のサポートを行う学習支援センターが置かれており、システムが確立されているようです。本学では、推薦入試合格者へのレポート課題から始まり、「建学のこころ」として行われる新入生オリエンテーションと越原研修、いくつかの学科で開講されている「キャリアデザイン」など、似た面があると思われます。今後、本学においての初年次教育を考える際に、参考にさせていただく事が多いと考え、総合科学研究所では、次頁の要領で講演会を行います。多くの方々の参加と今後のご協力をお願いします。



濱名篤・川崎太津夫編著  
『初年次教育 歴史・理論・実践と世界の動向』  
丸善株式会社(2006)

(文責:原田 妙子)

機関研究

## 「中学生の学力向上に関する研究」

～本校が求める『よい授業』の本質を目指して～

◎中学校学力向上研究グループ

昨年度の中等部における研究活動は、全教員が共通のテーマとして「よい授業」を掲げ、それぞれが授業改善に取り組みました。その成果として、「本校が目指すよい授業とは何か」ということに焦点を当てながら、研究グループで協力して1つの授業をつくりあげたり、公開授業を参観する中から個々の授業を改善し、それぞれが「よい授業」を追究していくための共通見解やヒントをつかむことができました。今年度は、これを更に道徳にまで広げ、道徳の授業における「よい授業」の本質を追究し、本校の年間シラバスとして定着させていくために研究活動を推進していくべきだと考えています。そのため、これまで各教科で行ってきた研究会に際しての公開授業を、今年度は一貫して道徳で推進します。

(文責:福田 誠)



第133回研究会



第134回研究会 公開授業

## 第133回研究会(5月12日)

## 「大学における初年次教育研究からの提言」(遠山教授より報告)

第133回出席者:中学校高等学校教諭・宇野民幸・木原貴子・小林田鶴子・谷口富士夫・遠山佳治・河村瑞江・渋谷寿・浅沼絵里子

## 第134回研究会(6月28日)

## 研究テーマ「道徳の授業における『良い授業』の本質を目指して」

公開授業「道徳:集団生活の向上」中等部1年 岡田 有希子 教諭

第134回出席者:中学校高等学校教諭・学園長 越原一郎・遠山佳治・柴山正・河村瑞江・渋谷寿・浅沼絵里子

学習指導要領では、道徳の授業の目標として、「道徳的な心情、判断力、実践意欲と態度などの道徳性を養うこと」が掲げられています。こうした目標を達成するため、今回は、学習内容に合わせて①身近な題材を用いること、②班活動を取り入れること、の2つの方法を用いました。具体的には、揭示係と正委員の言葉のやりとりを想像しながら、選ぶ言葉によっては相手にきちんと伝わらないことや、相手に伝える時にはどんなことに気をつけたいのかについて考えました。

(文責:岡田 有希子)

## 【今後の研究会の予定】

10月下旬予定

第135回

公開授業「道徳」(中野 容子 教諭)

11月下旬予定

第136回

公開授業「道徳」(平川 理基 教諭)

2月中旬予定

第25回研究発表会

研究授業「道徳」(サルバシヨ 有紀 教諭)

## 講演会のお知らせ

演題

# 初年次教育がなぜ必要なのか？

## —初年次教育の現状と課題—

日時 9/19(水) 13:00～15:00

場所 汐路学舎 南7号館 109教室 予定

関西国際大学では、初年次教育研究開発センターが設置され、初年次教育の実践的な研究が進められ、全国的に注目されています。1年生前期には、「キャリアプランニング」・「人間学概論」・「コンピュータリテラシー演習」などの授業が開講され、4年間の大学生活の基礎となる知識やスキルを身につける工夫がなされています。それらの実践・研究成果をふまえ、なぜ今、初年次教育が必要とされているのか、その課題は何なのかについて、考えるきっかけとなる講演会です。

※なお、講演に先立ち、本学で今年度4月に実施させて頂きました新入生アンケート調査について、機関研究「大学における効果的な授業法の研究4～初年次教育についての授業法の開発～」研究グループからの中間報告を予定しています。

関西国際大学初年次教育研究開発センター 開発テキスト  
【大学生からのスタディ・スキルズ 知へのステップ】(くろしお出版)  
【大学生と新社会人のための 知のワークブック】(くろしお出版)



講師

関西国際大学人間科学部教授、  
初年次教育研究開発センター長

岩井 洋  
Iwai Hiroshi

著書

『初年次教育 歴史・理論・  
実践と世界の動向』丸善(共著)  
など多数



## 『総合科学研究』創刊について

総合科学研究所では、これまで『総合科学研究所年報』を発行し、研究報告を行って参りました。しかし、広範囲にわたる学術研究・教育実践活動等、個々には多様な活動がなされていながら、研究成果を1冊にまとめたものはありませんでした。

そこで、平成18年度より、研究論文と教育実践活動、『総合科学研究所年報』の内容を1つにまとめ、『総合科学研究』が創刊されました。創刊にご協力下さいました所員の皆さまに感謝いたしますとともに、『総合科学研究』を通して、本学の教育に貢献できますようお願いしております。今後とも総合科学研究所の事業にご協力をお願いいたします。



『総合科学研究』創刊号

### 今年度運営委員

委員長	遠山 佳治 TOHYAMA Yoshiharu (短期大学部)	木原 貴子 KIHARA Takako (文学部)	酒井 映子 SAKAI Eiko (家政学部)
	白井 靖敏 SHIRAI Yasutoshi (家政学部)	谷口 富士夫 TANIGUCHI Fujio (文学部)	

### 研究所メンバー

所長	柴山 正 SHIBAYAMA Tadashi	顧問	河村 瑞江 KAWAMURA Mizue	主任	渋谷 寿 SHIBUYA Hisashi
講師	越原 もゆる KOSHIHARA Moyuru	職員	浅沼 絵里子 ASANUMA Eriko		

### 編集後記

ここに、総合科学研究所だより第5号をお届けします。執筆いただきました運営委員・共同研究メンバーの先生方、編集にご協力いただきました関係者の皆様に感謝申し上げます。

平成19年度になり本研究所のメンバーも一部変わりました。所長・柴山正、主任・渋谷寿、講師・越原もゆる、事務職員・浅沼絵里子、そして顧問として前所長・河村瑞江の5名が所属しています。所長以下、新体制の基で協力して総合科学研究所としての使命を遂行してまいります。本号では、最近の研究所の活動をご報告いたしました。今後も本研究所についてご理解いただき、より良い紙面づくりのために、皆様のご協力をお願いいたします。

総合科学研究所